

「言霊百神と古事記」

前々回は「言霊学」の定義をしました。前回は「言霊」の定義をしました。そして、第三回である今回は、言霊学のテキストとなる「言霊百神」と「古事記」>にフォーカスします。古事記は、文字通りにとらえれば日本の神話であり、私たち日本人が幼い頃から親しんできた昔話ですが、その実は言霊の奥義を記した、ある種の暗号文書ともいえます。「言葉=神」と実感した古代の人々が、そのことを五十音に並べ、後世に残すべき決意を込めて古事記に編みこみ隠したものと思われま

す。小笠原孝次先生の「言霊百神」は、まさしくその言霊の奥義を紐解くための解説書であり、「言霊百神」なくして言霊学は語れないバイブルといえるでしょう。「言霊百神」の神々は、伊勢神宮と石上神宮に深い関わりがあります。伊勢神宮はいうまでもなく五十宮であり、前段の五十神=アイウエオ五十音を祀っています。石上神宮は、伊勢神宮が言霊五十神そのものを祀るのに対し、言霊の運用を司る言霊百神の後段五十神をお祀りしています。建築様式も「神の原理を明らかにした構造」という意味の「唯一神明造り」が施されており五十音の暗示が随所に暗示されています。

では、五十音の意味するところを具体的にみていきましょう。天之御中主神「ウ」は渾然とした一者で、この一者から天地が分かれ、アとワが対発生します。吾と我（汝）、つまり高御産巢日（アオウエ・イ）、次に神産巢日（ワウエ・キ）に分かれます。古代中国哲学では五行（木火土金水）、仏教では五大（地水火風空）といい、この五行五大を「天之御柱」（忌柱、御量柱）といいます。

五柱の独り神は五階層の次元の元として全宇宙を形成し、この五階層は五重、すなわち家であり、つまり、生命・肉体の実体であるとしま

す。これを、岐美二神の御子生み、イ、キの交流の道である生命=イの道といいます。母音（アイウエオ）と半母音（ワキウエヲ）、また父韻（ヒチシキミリイニ）が互いに呼び合うことで結合し、子音=実相を生むことをヨバイ（呼び合い・婚い）、産霊とい

います。つまり、父韻である色=識・男性が、母音である実在（女性）を呼び出すのです。隠り神であり空相である実在は、識の原律の誘いによって初めてその実体を現わします。そして、言語の原則である布斗麻邇の五十音は、この原則によって生み出されます。古事記の最初の天之御中主神から九十八番目・天照大御神、九十九番目・月読神、百番目・須佐之男神までが「言霊百神」です。天地剖判より五十神は、五十音にあてられ、造化三神から伊邪那岐神、伊邪那美神までの十七神は、先天構造で天津神諸の命です。まず万象が出現する根源の兆しが育っていく母体（母音）と半母音をあらわし、次にその八つの兆しが八力神といわれ、八律父韻となります。先天十七神、つまり母音・半母音と父韻が、子音を創造していきます。

その父母が伊邪那岐神、伊邪那美神。そして親（祖）としての一者を伊邪那岐大神として、この創造意志が親音「イ」です。この伊邪那美神の御子の大事忍男神以下三十三神名が子音です。シュメールや中国、インドのヴェーダでも、アとワの神が他の神を生んだといわれています。

また空海は、長安で世界の宗教を学ぼうと、結局、日本の言葉に真言があると気づき、真言の言語哲学を説いたのです。小笠原孝次先生は、この世界を乗せている船は、音図だと言いました。これから、どのような音図に乗って進むのかということが大事なのです。

今は昔、言霊学を奥義として隠さねばならなかった歴史をふまえ、言霊布斗麻邇を科学的に活用できる時代が到来しています。言霊学の新しい時代が始まったのです。（言霊大学校基礎編テキスト参照）